

平成 2 0 年 1 1 月の解説（週間天気予報）

【 1 1 月の天候状況】

上旬は、北日本では天気が短い周期で変わりました。東日本以西では旬中ごろ前と後に気圧の谷が通過し天気が崩れ、その後は日本の南に前線が停滞した影響で曇りや雨の日が続きました。中旬の始めは東日本以西で引き続き曇りとなりましたが、中ごろは移動性高気圧に覆われて概ね全国的に晴れました。後半は気圧の谷の通過後、冬型の気圧配置が強まり、日本海側では雪や雨となりました。下旬の始めも北日本を中心に冬型の気圧配置となり、東・北日本の日本海側では曇りや雨または雪となりました。その後は短い周期で低気圧が日本付近を通過し、全国的に天気が崩れました。

月を通しての日照時間は北日本で平年より多くなり、東・西日本では少なくなりました。降水量は九州南部地方で平年より多くなりました。気温は沖縄地方で平年より高くなりました。

【 1 1 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年（注）より 4 ポイント高い 75% でした。北日本と北陸から中国地方では 6 から 11 ポイント高くなりましたが、四国地方では 5 ポイント低くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は例年に比べてほぼ全国的に 0.2 から 0.6 小さくなり、全国平均では例年より 0.2 小さい 2.1 でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は概ね全国的に例年と同じで、全国平均では例年と同じ 2.2 でした。

（注）例年値は気象庁 HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【 1 1 月の週間天気予報から】

今月 16 日には、低気圧が本州の南岸を東進し、北日本を寒冷前線が通過して全国的に雨が降りました。また、17 日夜には、低気圧が北日本を通過し、北日本の日本海側と北陸地方を中心に雨となりましたが、関東甲信地方

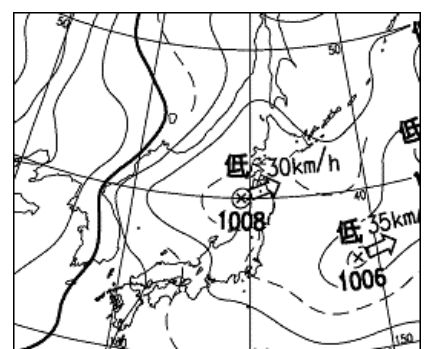
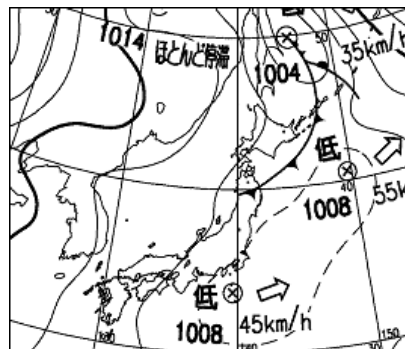


図 1 2008 年 11 月 16 日 21 時（左）、17 日 21 時（右）の地上天気図

では北部の一部を除いて雨は降りませんでした。（図 1）

関東甲信地方各都県の週間天気予報では、16 日の天気は 7 日前と 6 日前には「曇り時々晴れ」と、5 日前から 3 日前までは「曇り」と予報しました。また、17 日の天気は 6 日前

から 3 日前まで「曇り一時雨」と予報しました。

図 2 は 13 日発表の予報で使用した予想図です。16 日はサハリン方面を低気圧が東に進みますが、日本付近には明瞭な低気圧が予想されておらず、関東甲信地方には雨が予想されていませんでした。一方、17 日は

東海地方から関東地方にかけて気圧の谷がやや明瞭となり降水も予想されていることから、雨の降る可能性が高いと判断しました。

しかし、実際には予想になかった低気圧が 15 日に東シナ海で発生し、16 日にかけて本州の南岸を東に進みました。関東甲信地方ではこの低気圧の影

響で 16 日に雨が降り、この日に雨を予想していなかった予報は見逃しとなり、逆に 17 日は関東地方の北部を除いて雨が降らず、予報が空振りとなったところが多くなりました（図 3）。

現在の予測技術では、このような小さな低気圧の発生や通過のタイミング、雨域の広がりなどを何日も前から適確に予想することは難しい場合があります。週間天気予報では雨の降る日が予想した日の前後にずれてしまうことがあります。このため、週間天気予報は、最新の予報をご利用ください。

【1月の週間天気予報の利用にあたって】

1 月後半から 2 月前半にかけては、1 年のうちで最も気温が低い時期です。強い冬型の気圧配置となって強い寒気が日本付近まで南下してくると、西日本の平野部でも氷点下になることがあります。気温が氷点下になると地表面の水分が凍り、最高気温が上がらないと氷はなかなか溶けません。この状態が何日も続くと凍結による被害が拡大します。週間天気予報で気温が低い状態が続く予想となっているときは、特に最新の情報に注意して、低温に対する早めの対策を怠らないようにしましょう。

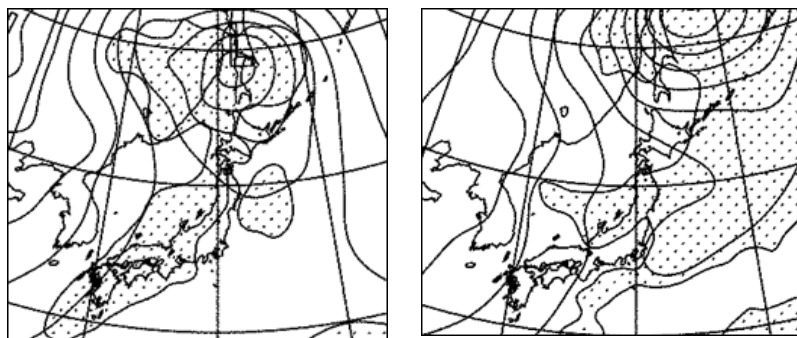


図 2 2008 年 11 月 13 日の予報で使用した地上予想図、11 月 16 日 21 時（左）、17 日 21 時（右）、（水玉模様は、降水が予想される範囲を示す）

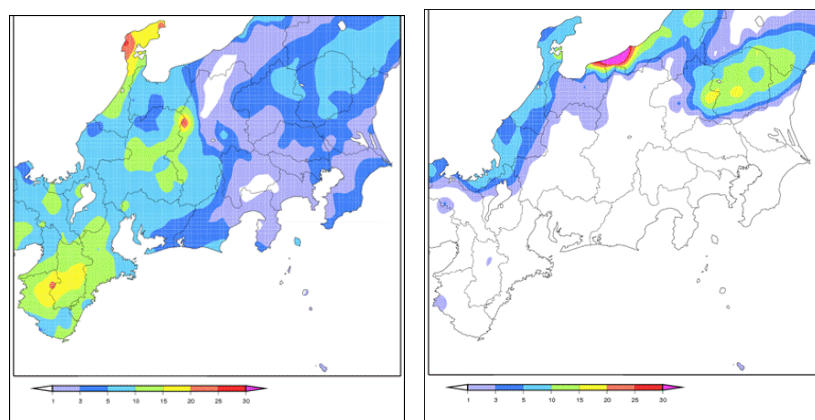


図 3 2008 年 11 月 16 日（左）、17 日（右）のアメダス日降水量（ミリ）